



上原一慶先生（右）と瀧澤秀樹先生（左）

第十回 大阪商業大学比較地域研究所講演会

## 近現代東アジア史研究

朝鮮・中国・日本

### 第2部

上原一慶

「中国研究を課題にすにいたった経緯と現状」

閻 和平

去る七月六日に、第十回大阪商業大学比較地域研究所講演会が行われた。今回の講演会は幾つか特筆すべき点があった。まず、講演会講師はこれまで外部から招いたゲスト・スピーカーにお願いしていたが、今回は、本学教員であり、前比較地域研究所長瀧澤秀樹教授と現比較地域研究所長の上原一慶教授のお二人であった。もう一つの興味深いところは、講演内容である。研究所の講演といえは、特定の専門テーマを立ててのお話が一般的であるが、今回は、研究者としての「研究の歴史」である。例えていえば、一般の講演が演出の整ったお披露目の舞台であるのに対して、今回の講演はいわばお披露目の舞台裏の話である。実はお二人は今年度をもって揃って定年退官を迎えられるのだ。お二人とも数十年にわたって研究活動を続け、それぞれの専門分野で確たる大家の地位を築いてこられた。それだけに、一般の方にとって

「研究とはどういうことなのか」、「何故そんなものを研究するのか」、つまり普及することのない研究の裏側、研究者の裏顔を知る絶好な機会であった。また、同業である私たち若輩にとっては、研究者としての心得を再確認するよい機会であった。分担の関係で、これから講演会第二部の上原一慶教授の講演を限定して紹介する。

講演内容の紹介に先立ち、上原先生の略歴を紹介しよう。

先生は一九四三年八月七日の東京都生まれである。渋谷区立大向小学校、渋谷区立松濤中学校、東京都立戸山高高等学校を卒業後、一九六三年に東京大学教養学部文科Ⅲ類に入学し、続けて一九六七年に東京大学社会学系大学院国際関係論専門課程に進学し、勉学を重ねた。先生が専任教員として教鞭を取りはじめたのが、駒澤大学経済学部で、中国経済論をご担当された。一九八一年に京都大学経済研究所に転任し、同研究所の比較経済研究部門で二五年間に渡って研究に注力された。二〇〇六年に京都大学を停年退官したのを機に、本学経済学部にて奉職され、二〇〇九年に第二日大阪商業大学比較地域研究所長に就任し現在に至っている。講演のなかで先生は「自身のお名前の由来を披露された。先生によると、お名前の「一慶」は、お父様（二郎）とお母様（慶子の頭文字をそれぞれ頂き、「一つの喜び」という意味だそうである。このようなこぼれ話が聞けたのもこの講演会の醍醐味の一つであった。

さて、先生の講演テーマは「中国研究を課題にするにいたった経緯と現状」である。先生の現在の専門分野は中国経済論、中国経営管理論、比較経済分析であるが、いつ頃、どういう経緯で現在の専門分野に至ったのだろうか。それは、学部時代の東京大学駒場祭における展示をめぐるある先生との論戦がきっかけ

けとなった。当時駒場祭で「アジアの共産党」というテーマ展示が行われた。ある先生が一つのブースの展示を見て、「問題がある」として企画全体の中止を求めた。この時、上原先生は中国共産党を取り上げて展示に参加していたが、「個別の展示の問題を全体に広げてよいか」と力説し論戦した結果、展示は無事継続された。ところが、後に大学院進学時、その先生が頑なに上原先生の受け入れを拒否した。幸いにも当時の大学院研究科長江口朴郎先生の賛成を得て、上原先生は無事に進学を果たし、中国研究者・古島和男先生の弟子となり、晴れて中国研究の道への第一歩を踏み出した。

次に長い中国研究活動のなかで、先生の研究スタイルあるいは研究姿勢に多大な影響を与えた三つの「出会い」を紹介された。

第一の「出会い」は日本国際問題研究所で安藤正士氏、毛利和子氏との出会いであった。

日本国際問題研究所は故吉田茂元首相のイニシアティブで一九五九年に設立された研究機関である。同研究所中国部会が一九六三年から一九七一年までに安藤正士を主査に『新中国資料集成』五巻を八年掛かりで出版した。『新中国資料集成』は第二次世界大戦終了前後から一九五八年までの中国政治・経済・軍事・外交などに関する基本的資料を翻訳・収録（大阪大学田中仁・資料解題より）した、現代中国研究の一級資料の一つである。上原先生は一九六七年に大学院に進学後、指導教官の古島和男先生の紹介で安藤正士氏と知り合い、程なくして『新中国資料集成』第五巻の編集に関わるようになった。第五巻は資料、文献目録、文献資料を除いて、七三八頁あり、年表資料だけでも一三四頁を数える。いまは、パソコンをはじめ、種々の情報機器があるが、手作業中心のあの時代に、



これだけの量の資料を集成するには、いまの私たちには想像に絶するものがあるといわねばならない。量に加えて、この時、資料の集作成するにあたり二つの原則が貫かれた。①「資料は原則として、最初に発表されたもの」から採ること。②「翻訳は全て原典からの翻訳」にすること。また年表資料作成でも同様の原則が適用された。こうした原則が貫かれたからこそ、資料の価値が担保され、同資料集成がいまも活用される存在となった。上原先生はこの時の経験が自分の「原典重視の研究姿勢」の形成につながっていると振り返った。

上原先生が挙げた第二の「出会い」は中西功氏との出会いであった。

中西功は明治四三年三重県生まれ、一九二九年県費留学生として上海の東亜同文書院に入学して以来、中国との関わりが始まった。戦時中に中国社会経済の分析に関する論文を発表し、「満州経済論争」「中国統一化論争」を展開する一方、中

国共産党「上海情報機関」に秘密に参加し、延安に情報を提供していた。このため、一九四二年に逮捕投獄された。終戦後、一九四六年に日本共産党に入党し、一九四七年の第一回目の参議院選挙で当選した。一九四九年に「中西功意見書」を提出し、日本共産党中央を批判した。中国で文化大革命が起きた以降、中国に関する数多くの論文を発表した。中西功は社会運動家・中国研究家として知られている（明治大学福本勝清「中西功の中国社会論」より）。

上原先生は大学院時代に中国問題の研究会で中西功氏と知り合い、中西が日本共産党所属参議員でありながら、「日本共産党に対する自立性を保ち続けることに、驚きと敬意を抱く」に至った。とりわけ、文化大革命が起きていた中国では、毛沢東に対して礼賛一色の中で、中西は集団指導体制、生産力発展、漸次的社会主義建設いわゆる第八回党大会路線こそが中国社会主義体制の要求であり、一九五七年以降の政策転換した毛沢東路線がそれと基本的に対立するものであり、今日の中国の抱える問題の基本であると主張した。中西功の「權威にすぎらない自分なりの見解を打ち立てる」研究姿勢に、上原先生は強い衝撃と影響を受けた。そして、それが上原先生の研究姿勢の二本柱の一つとなった。

上原先生が挙げた第三の「出会い」は竹内好氏との出会いであった。

竹内好は奇しくも中西功と同じく明治四三年生まれで、生地は長野県である。彼は社会評論家、中国文学研究者で特に魯迅作品の翻訳とその研究の大家である。魯迅はかつて仙台で医学を勉強し、人々の身体の病気を治そうとしたが、中国社会の現実を見て、たとえ頑強な肉体があっても社会が病ん



花束贈呈役の孫一萱先生と

であれば何の助けにもならないことを悟った。そして革命によつて社会体制を変えることは可能であっても、それを支える人々の心が病んでいては、その体制を維持することは不可能であると、魯迅は考えた。魯迅は政治体制など社会の仕組みを治すことではなく、文学作品の中で中国人の「心の病」すなわち長年中国人に染みついていく悪習、悪しき考え方などありとあらゆる否定すべきもの（長野大学 佐々木溼「竹内好と魯迅、毛沢東」より）を曝け出して民族の脱胎換骨を促した。代表作の一つが「阿Q正伝」である。

竹内好は魯迅研究のなかでアジアの近代を捉える「敗北―苦痛―忘却―抵抗」の理論的枠組みを打ち立てた。すなわち、竹内好は「アジアがヨーロッパに敗北し、敗北に対処しなければならなかった」ことをアジアの近代の独自性だと考えた。一方、「敗北は苦痛である。敗北の苦痛から逃れる方法

は、その敗北を忘却し、苦痛に抵抗を放棄することである。だが、抵抗を放棄することは墮落につながる。墮落すれば奴隷になってしまう。奴隷は苦痛から逃れるために主人に迎合するような行動をとる。また、奴隷は、機会があれば、自分で主人となり、他人を自分の奴隷にしようとする。（成蹊大学 光田剛「講義ノート アジアどう見るか」より）。

上原先生の話によると、「欧米近代をいち早く取り入れ、脱亜としてアジアを侵略した『奴隷の優等生国家』日本と、あくまでも自力で「解放」をとげた中国とを対比する竹内好のこの中国・日本論の考え方、またその比較手法に強く共感を覚え、自らの研究姿勢に多大な影響を与えるものだった。

上原先生は近年病を患って体調が必ずしも万全ではないなかで、押して講演に臨まれ、自分の研究人生の成り立ちの一端を披露して下さった。時代が変化し研究者にはより多くの目に見える成果が求められている。このこと自体が新しい価値観の中で必ずしも間違つたものではないと思うが、量を追求めるあまりに、ややもすれば、質を疎かにする危険性が孕んでいるようにも思う。上原先生が講演の中で再三に強調された原典重視と独自性は今日において一層重要となっていると先生からの警鐘のようにも聞こえた。

今回の講演で上原先生が自分の研究人生を振り返るに当たり、その原点を人との「出会い」に求めた。奇しくも、大阪商業大学のキャッチフレーズが「人生をかえる出会いがある」。これも一つの「出会い」であろう。

先生のご健康回復を心よりお祈り申し上げます。

（本学経済学部教授）

瀧澤秀樹

## 「経済史研究から東アジアの地域史研究へ」

— 50年間の研究生活を「回想しながら」—

田崎公司

二〇一三（平成二十五）年七月六日（土曜日）、本学四号館において、本学大学院・経済学部教授である瀧澤秀樹先生、同じく上原一慶先生の退職記念講演会が開催された。比較地域研究所の初代所長である瀧澤先生と二代目所長である上原先生が来年三月末をもってご定年を迎えられ、ご退職される。

最終講義には半年以上も月日があるもの、お二人への先生のお祝いの気持ちを込めて、第10回という記念すべき節目を数える大阪商業大学比較地域研究所講演会を飾る記念すべきセレモニーとして、長年にわたって研鑽されてきたご研究の一端をうかがう機会をとって位置づけられたのである。

講演会当日の会場は満席である上に、参加者の性別・年齢がバラエティーに富んでいた。まさに国籍と社会的活動分野を異にする人々が会場に駆けつけられた。申込者多数で会場変更になったと聞かされていたものの両先生の人間関係の広さと、両先生が如何に慕われているのが実感された。さらに聴講者に講演会に対する大きな期待感も感じられたのである。小稿では、前段を飾った瀧澤先生の講演会についての報告を、私的な感想を含めて、力不足ながら簡単に挙げていく。

瀧澤先生は、一九四三（昭和十八）年に富山県にて誕生され、家族内での学問的な環境とキリスト教との出会いとを背景に高校まで地元で過ごされた。東京大学文科Ⅱ類合格後に上

京、駒場の教養課程で西洋経済史の泰斗で戦後日本の知の巨人のお一人である大塚久雄氏と出会い、社会科学研究に開眼される。本郷にある経済学部・大学院経済学研究所進学後は労働経済論の隅谷三喜男氏の学問的影響の下、劣悪な労働環境に苦しんだ製糸工女の研究に没頭された。この成果は、後に『日本資本主義と蚕糸業』（未来社、一九七八年）として上梓され、東京大学より経済博士号を授与されている。

瀧澤先生は一九九七（平成九年）四月、赴任されていた甲南大学経済学部より「三顧の礼」をもって招かれ、初代比較地域研究所所長に就任された。比較地域研究所は本学大学院地域政策学研究科開設に連動し、商業史研究所と産業経営研究所を統合、関西における地域学研究の中核を担うべくスタートした。そして、そのブランドデザイン創りに当たられたのが、瀧澤先生その人であった。経済学などの社会科学を基礎として、関西や東アジアといった個別具体的な地域研究と地域科学をも包含し、さらには隣接諸科学をも含めた総合的な視野から地域の問題を研究することにより、地域の個性的な発展に寄与することを目的とし、様々なプロジェクトや日中韓三国持ち回りのシンポジウムを開催されてきた。比較地域研究所の設立と発展に大きな功績を残され、二〇〇八年四月に上原先生に二代所長を託された。

瀧澤先生の講演は、来場者への感謝の言葉からはじまった。その中には私にとっても懐かしいお名前も存在した。私が瀧澤先生の側にあつた十五年間だけでも様々な人々の面影が浮かんでくる。先生には、沢山のコリアの友人が存在し、瀧澤先生の「学問と人」とを紹介をされている。本講演では、金俊行氏の「瀧澤秀樹先生『人と作品』」（『コリアン・スタディー

ズ」創刊号、二〇一三年）の内容を紹介する形で、「他の研究者の眼に映った」自らの研究生活を語られた。この論文は瀧澤先生の作品を先生本人より体系的・内在的に理解・論評されているユニークな作品であると評価されている。そして金氏のとまじめによれば、瀧澤先生の作品には三つのモチーフがあるという。

第一の素材「ともだち（人）」。瀧澤先生が学問の世界の扉を叩いた時代、東京大学経済学部・大学院経済学研究科は、山田盛太郎氏を代表とする講座派、大内力氏を代表とする労農派・宇野派などのマルクス経済学が敗戦後の社会の再生をも視野に入れながら、大きな影響力を有していた。なおかつ全共闘と機動隊との東大安田講堂攻防を政治ショーとして政府・マスコミが「演出」している時代に、瀧澤先生は、「民衆」・「人民」・「階級」という「概念」よりも「具体的な人間そのもの」への関心を基本に、社会の実相に迫ろうと自らの学問確立のために格闘された。ここで想起されるのが、遠山茂樹・今井清一・藤原彰共著『昭和史』（岩波新書、一九五五年）の内容をめ



ぐり、「人間不在」と亀井勝一郎氏が批判をおこない時代を代表する大論点となった昭和史論争である。戦後世界の日本における歴史認識の問題、さらに歴史教育や歴史教科書問題をめぐる論争を瀧澤先生は、どのように受け止められたのであろうか。前掲『日本資本主義と蚕糸業』に描かれた「島田マツエ」という一工女の生涯によりそった分析や、講座派マルクス主義の歴史家であった服部之總氏をめぐる中村政則氏との「親鸞」論争など、「時代と学問の権威」に対する瀧澤先生の学問的スタンスは一貫して「生身の人間」に向き合っている。

第二の素材「うた（文学）」。コリアの「うた」に関する瀧澤先生の知識の広さは、おそらくその第一人者といっても誇張ではないであろう。植民地時代の「朝鮮歌謡」知識や韓流ドラマBGMに流される何気ないメロディーに歴史的文化的な意味を即座に理解・解釈される。二〇〇八年「ロシア革命・九十一周年の日」に七十三歳で惜しまれながら亡くなったジャーナリスト・ニュースキャスターの筑紫哲也氏と私が一緒にした際、「人類が発明した最大の発明品は『うた』である」とのお話を何度か伺うことがあった。言葉が分からなくても、一緒に喜怒哀楽といった感動を分かち合える「うた」こそが、人類の未来の希望であると筑紫氏は力説されていた。「うた」に込められた思いと、さらに進んでその言葉に込められた意味を理解した時、等身大の人間として同じ目線で相手を理解することができる。瀧澤先生の文学への注目と「ひと」をより深く理解したいとするお気持ちには、先生の社会科学理解の重要な構成要素となっているのである。

第三の素材「地図」。地図は文学作品と同じく、読む人それぞれの味わい方ができる。地図に描かれた風景や人々の暮

らしに想像を掻き立てられるのである。前述したように瀧澤先生の人生の転換点としての大塚久雄先生との出会いがある。「何か一種の靈感」、「頭の中でビーンと音がした」、「本当に呼ばれる者の声、預言者に出会ったような気持ちになった」と先生は当時を振り返る。「大塚先生は文章もすごく面白いけれども、あの先生がしゃべると、見てもいないスペインの無敵艦隊とイギリスの艦隊が戦争をして、スペインが負けて逃げていったというのが目に見えるように話すのがうまいのです」〔瀧澤秀樹・田崎公司・小田忠（「インタビュー」）我が研究の半生を語る―瀧澤秀樹教授に聞く―〕大阪商業大学比較地域研究所紀要『地域と社会』第一号、二〇〇八年九月、五頁。学部生だった先生の脳裏に英仏海峡で繰り広げられた大海戦の地図が描かれる。また先生の論文の本旨や統計表にも「地図」の世界とそこに住まう人々の暮らしが反映している。

瀧澤先生の第一の学問的転機は、一九七四年におこった在日韓国人政治犯・高秉沢氏の事件がきっかけだったという。その五年後に朴正熙大統領射殺事件がおこり韓国社会が激動期に入った。「ソウルの春」が挫折して、光州事件が勃発する。その一方でNICS論の登場のなか韓国経済が注目されるに至った。甲南大学の在外留学制度を利用してソウル大学に一年間留学して、『ソウル讃歌』(田畑書店、一九八四年)と『韓国民族主義論序説』(御茶の水書房、一九八四年)とを上梓し、韓国現代社会論に研究をシフトする。その間、ソ連崩壊と阪神・淡路大震災の勃発とが与えた衝撃も想像に難くないものがある。

第二の学問的転機は、二〇〇〇年七月の急性心筋梗塞である。無事に退院され、しかるべき文章を書かれた先生の意志の強さには感動した。時を同じくして中国朝鮮族留学生が

次々と先生のゼミに入門する。翌年から中国延边朝鮮族自治州を訪問し、ゼミ生やその家族の方々と「情の世界」を作り、漢族、韓国・朝鮮人、日本人もが加わった「ミニ東アジア共同体」を作りあげた。その中心にあったのが「情の人」瀧澤先生であったのである。

二〇一一年に再び癌という大病に打ち勝って現場に復帰された先生は、意気軒高である。興味本位の憶測ではない歴史的事実に基づいた「金日成の実像」に迫ろうとされ、韓国や北朝鮮の歴史書が無視ないし軽視してきた「朝鮮義勇軍」の事績発掘、そして「毛沢東の朝鮮戦争」に新たな研究テーマを見つけ出されようとしている。先生の学問的探究心は身体的には満身創痍になろうと止むことはないのである。

現在、瀧澤先生は国際高麗学会顧問を務めつつ、「東アジアの国家と社会」、「中国朝鮮族社会の現状」を二本柱とする東北アジア近・現代史に問題関心を広げておられる。現在、東アジアの歴史認識が、中国や韓国のみならずアメリカのオバマ政権までもが大きな対日本外交の問題として、政治的な緊張を強めつつあるなか、瀧澤先生のご研究が、日本側からの信頼しうる研究者の発信として、中国・韓国・北朝鮮等の東アジア諸国間の関係回復に向けて大きな示唆を与えるものとして注目されるのである。

(本学経済学部准教授)

# ハワイの風

飯田耕二郎

今年の夏は暑かった。八月はハワイで過ごす予定をしていたが、いつもの宿泊場所であるコンドミニアムの部屋の予約が取れず、九月に別の所になってしまったので、八月は京都で過ごすことになった。昼間はもちろん暑いのが、京都はとくに夜の暑さがこたえる。昼間の熱気がそのまま残り、夕立が降っても涼しくならない。扇風機を回しても全然涼しい風がこないのので、毎晩エアコンに頼りっぱなしだった。本当に体が溶けそうだった。こんな時はハワイの風がうらやましい。ハワイの知人から、申し訳ないような気持ちですとのメールがあった。

ハワイといえは一年中遊泳客の絶えないワイキキ・ビーチを連想し、常夏のイメージがある。私の友人も夏は暑いでしょうと聞いてくる。しかし実際はそうではない。夏でも涼しいのである。確かに日差しは強いので目なたを歩いていると暑く感じるが、木陰に入ってバスなど待っていると涼しく感じる。何とも心地よい風が吹いてくる。私はこれを「ハワイの風」と呼んでいる。これが一年中ある。西暦二〇〇〇年に一年間滞在して体験した。時にはそよそよと、時には荒々しく吹くこともある。この時、山側と海側の両方に面するワイキキのコンドミニアムの三〇階の部屋に住んでいたが、山側からの風が強く、窓を開けていると時々、部屋に置いていた書類が舞い上がるほどだった。

このハワイの風はなぜ一年中、同じ方向から吹いてくるのだろうか。『ハワイの自然』という本には以下のように説明されている。

ハワイは北回歸線の少し南側（赤道側）に位置しており、いわゆる亜熱帯に属する。赤道付近で暖められた空気が上昇して冷やされながら北方（北半球の場合）へ移動し、北緯三〇度付近で下降気流となると、今度は南方への表層気流となって再び赤道方面に帰っていく。この風は古くから船乗りたちが利用して航海したことから貿易風（北半球では北東貿易風）と呼ばれる。貿易風が海上で吸収した湿気はハワイに大量の降雨をもたらす。ハワイ諸島はどの方向も広大な海で囲まれており、風は海の緩衝作用を受けて平均化され穏やかな海洋性気候をもたらす。ホノルルの年平均気温は二五・一度で、八月（最高）と二月（最低）の平均気温の差は五・二度であり、東京の二一・九度に比べてその差ははるかに小さい。ハワイにおける過去の最高気温は一九三一年にハワイ島で記録した三七・八度であるが、ハワイで三五度をこすことはめつたにない。（半月以上も三五度を超した今年の日本とはエライ違いである。（筆者）ハワイでは気温を摂氏ではなく華氏で表すので、天気予報を聞いてもピンとこないが、華氏九〇度は摂氏



三三二一度なので、これを一つの目安にするとよい。

ハワイはまた地形が気候に影響を与えている。ホノルルのあるオアフ島の場合、中央にコオラウ山脈が北西―南東の方向に延び、山体をはさんで北東貿易風の風上と風下では降水量に大きな違いがあらわれる。島に達した湿った貿易風は山体にぶつかると斜面にそって上昇する。上昇した空気は冷やされるので、含まれていた水蒸気が凝結して雲となりウインドワード風上側（北東斜面）に降雨をもたらす。湿気を失った風は山を越えてリーワード風下側（南西斜面）を下るが、もはやあまり雨をもたらさない。そこで風下側はいつも晴天で心地よい風が吹くことになる。オアフ島のホノルルをはじめ、マウイ島のラハイナ、ハワイ島のコナなどリゾート地がみな風下側にあるのはこのためである。また日差しがきつく湿度も高いはずのハワイで日本の夏よりもずっと過ごしやすく感



コンドミニアムより山側  
ハワイ大学とマノア谷をのぞむ  
(2010年8月 筆者撮影)

じるのは、この貿易風のおかげという訳である。山脈を離れるに従って降水量は急激に減少していくので、ホノルル市街の年間降水量は五六〇ミリに対して、そこから一〇キロも離れていないハワイ大学のさらに奥地のマノア谷の最奥部は四〇〇〇ミリの降水量がある。

数年前にマノア谷からの洪水でハワイ大学の図書館の一階と地階が水没するという事件があった。またコウラウ山脈の北東側の斜面は降水による浸食のため、切り立った崖になっている。

二〇〇六年の七月から八月にかけて朝日新聞の夕刊で「ニッポン人・脈・記」というシリーズで「ハワイの風」という特集が十回にわたって連載された。そのキーワードはやはり貿易風で、その風はやさしく、時に厳しく、日本との間を吹き渡るといのである。そこでハワイと日本の交流、そしてハワイに関係のある何人かの日本人が取り上げられた。そのうち二つばかり私のコメントつけて次に紹介しよう。

①ハワイのマウイ島はウインドサーフィンの聖地で、二つの火山がつくる地形が生み出す風と波が、世界中からウインドサーファーを集める。とりわけ島北部のビーチに年数回現れる、JAWS（ジョウズ）と呼ばれる巨大な波。毎冬、日本の近くの北太平洋で発達した低気圧からのうねりがはるかに押し寄せ、高さ十五メートルとなつて牙をむく。そのJAWSに挑戦し続ける日本人を紹介する。その一人が二〇〇五年に癌で亡くなった飯島直樹。彼の闘病生活を描いた『天国で君に逢えたら』は大沢たかおの主演で映画化され、二〇〇七年たまたまワイキキビーチで行われた試写会を見に行ったことがある。



コンドミニアムより海側  
ヨットハーバーとマジックアイランドをのぞむ  
(2010年9月 筆者撮影)

②一九六六年に誕生した常磐ハワイアンセンター、現在のスプリゾートハワイアンズをモデルにした映画「フラガール」。  
音楽はハワイのウクレレ奏者、ジェイク・シマブクロ。彼は母方が福島県出身の日系五世である。この映画がきっかけかどうか分らないが、いまフラが日本のおばさんたちの間で流行っている。団体でハワイに踊りに行くツアーもあるそうだ。逆にハワイでは夏になると、各地でボンダンス（盆踊り）大会が開かれる。日本ではあまり見られない光景がハワイでは毎週のように見られる。

話が日本とハワイとの人の交流に逸れてしまった。ここで私のハワイとの交流のきっかけ、つまりなぜハワイを研究対象にするようになったかを述べることにしよう。私は学生時代から開拓地や移住地に関心があり、最初フィリピンのミンダナオ島

ダバオに行った日本人移民を調べに二度現地に出かけたことがある。それからアメリカ大陸に多く渡った移民に興味が出ていく。ハワイはどちらかというとアメリカの辺境地の感じで日本の沖縄と同様のイメージ（偏見）を持っていて、あまり興味はなかった。同志社に就職してからキリスト教に関心を持つようになり、そのうち同志社大学の学長であった星名泰の父親である星名謙一郎という人物がハワイでキリスト教伝道を行い、その後テキサスやブラジルで活躍し、最後はブラジルで暗殺されたということを知って彼について調べてみようと思った。今から三〇年ほど前のことである。ちょうどその頃、同志社大学人文科学研究所で「海外移民および海外伝道に関する研究」班が発足し、私はこれに参加することにした。そこで星名に連なるハワイのキリスト教の伝道者について調べ始めたのが、ハワイとのかかわりの発端である。NHKの大河ドラマ「八重の桜」で初期の同志社卒業生で熊本バンドの人達が登場するが、彼らに続いて神学部を卒業した連中が国内だけでなく海外、特にハワイへ日本人移民にキリスト教を教えるために出かけて行った。彼らについて調査するために一九八六年に三カ月間の休暇をもらってカリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）に行った後、ハワイに向かいハワイ大学やキリスト教会で史料蒐集にあたった。日曜日にはハワイ最初の日本人キリスト教会（現在のヌアナ教会）の礼拝に出席したが、教会の中で吹く風が何ともいえないほど心地よかったことを覚えている。その後、ハワイの日系人社会の変遷について興味がわき、本来の専攻分野である地理学の立場から考察しようと思うようになった。一九九五年から本学に赴任したが、海外研究員制度によりハワイ大学の客員研究員として一年間滞在でき、さらに出版助成制

度により、ハワイに関する二冊の本を出版できたことに對し感謝したい。現在は自分の研究のきつかけとなった星名謙一郎の生涯をまとめる作業を行っている。

さて、再び本来の風に話を戻そう。私は二〇〇〇年以後もほとんど毎年のように夏になるとハワイに出かける。さいわい知り合いの人が所有するワイキキのコンドミニアムの一室が夏は空いていることが多く、そこを一ヶ月ほど借りることにする。

二六階の山側である。私は高所恐怖症で、一年間三〇階にいたときは怖くてほとんどベランダ（ハワイでラナイ）に出ることはなかった。寝る部屋もベランダから離れた奥の部屋で、景色のよいベランダ側は娘に譲った。しかし最近ようやく慣れてきてあまり恐ろしくなくなったのは歳のせいだ。それはともかく、普通ワイキキで人気があるのは海やダイヤモンドヘッドが見える海側（ハワイでマカイ）の部屋であるが、風通しはよくない。

山側（ハワイでマウカ）の方が風通しがよい。山側から風が吹いてくるからである。海は見えないが山の斜面にある家々の夜の灯りが結構きれいである。昼間は窓を開けて風通しをよくし、夜寝るときは窓を閉めないと寒いくらいである。もちろんエアコンは必要なし。あっても使ったことがない。ときどきマノア谷で降った雨で虹がみえる。ハワイは虹が有名だ。コンドミニアムには駐車場の屋上にリクレーション・スペースがある。プール、ジャクージ、サウナなど。サウナに入ってシャワーを浴び、外に出ると爽快な風が体に心地よい。この後、アヒ（まぐろ）・ボケ（切身をこま油でまぶす）をさかかなに冷たいビールでも飲めば最高である。

しかし今年の部屋は海側の三二階だった。景色は抜群である。目の前のイリカイホテルの横がヨットハーバーで、その奥

にアラモアナ・ショッピングセンターの海側のマジック・アイランドがみえる。陽当たりがよくて昼間は暑そうだ。風通しもあまりよくない。ところが今年ほとんど毎日、朝から夕方までハワイ大学の図書館に出かけていたので、たいてい夜間のみ部屋で過ごし、エアコンをほとんど使うことはなかった。ハワイ大学の図書館といえば、エアコンがかなり効いている。一時間以上いると半袖では寒くなってくる。上着を着たり、途中で休憩して外でしばらく過ごしたり、近くの食堂で昼食をとったりする。アメリカの大学は概して図書館は寒いと聞かすが、とくにハワイは年中暖かいので、人間のためでなく本を保護するための説もある。

ともあれハワイへ世界中からこんなに観光客が来るのはやはり魅力があるからに違いない。リピーターもけっこう多いと聞く。その魅力の一つが「ハワイの風」ではないだろうか。私がハワイに惹かれるのも「ハワイの風」のせいかもしれない。

#### 参考文献・

清水善和『ハワイの自然』

（古今書院、一九九八年）。

#### 朝日新聞

二〇〇六年七月三日～八月七日 夕刊。

（本学総合経営学部教授）

# 辻子谷水車郷見学記

明尾圭造

七月初旬、学術研究事務室の有志で石切の辻子谷水車郷を訪ねた。ここは、以前勤めていた芦屋で、水車産業の調査（西摂地域）をしていた頃、一度は見学したいと思っていた場所だった。

芦屋もそうだが、水車場は高低差の水力を動力源とするため、急斜面を上がった山中に設置される。六甲山麓の芦屋に対して生駒山麓の石切の山中に水車場はある。

当日は、近鉄石切駅から音川の谷筋に沿って急峻の坂道を登った。人一人がやっと歩けるような細道や急に現れる階段を上り下りしながら息を切らして登ったが、途中、地蔵さんが其処彼処に目についた。その多くに帽子や前掛けがかけられてあり、屋根囲いとなっている。地元で大切にされている証したが、地蔵盆のころはさぞかし賑やかなことだろうと思った。

やがて、むせ返るような翠の気配が迫った

ころ、水車郷に到着した。そこで、施設設置に尽力された地元昭楠会の北口さん、岩本さんの出迎えを受け、水車場設置に至る苦労話を聞きながら山中の水車風情を満喫した。

辻子谷には最盛期に四〇数輛の水車があつ



水車場へ向かう途中のお地蔵さん

たというが、昭和五四年を最後に現役水車の稼働が絶えた。その後、地元の風物詩として水車を惜しむ声が起こり、昭楠会が縮小サイズの水車小屋や直径六メートルの原寸大水車を再現するに至ったという。

しかし、水車の大きさには圧倒される。平地の田畑に設置される水車とは違い、高低差を利用したビジネスモデルタイプだ。芦屋や住吉の水車場跡にはよく調査に出かけたが、いわゆる車輪の落とし口遺構のみで、復元と言えども原寸大の迫力が、ここにはある。

今では、カワニナの放流やホテルの育成、雨でも楽しめる集会所も設置されており、まさしく水車郷の名にふさわしい体感施設となっているが、水車が産業としての手段であったことを如実に物語る立派な歴史体験施設でもある。

辻子谷水車の歴史は古く、江戸中期には胡粉製造をはじめ、和漢生葉の細末加工に従事

した。大坂道修町の薬種問屋の仕事を受けたものだが、現在でも動力源こそ替われ、製薬会社があり、坂道の途中で微かに薬種の香りが漂っていたのには驚かされた。

生駒西麓には辻子谷を含めて七谷あり、いずれもが急峻を利用した水車稼業の集積地であったという。幸い本館佐古文書に七谷の一つ、額田谷の水車史料が残っている。延享五年（一七四八）の水車借用書類がそれだ。

河州額田村山之内ニ而其元所持之水車

五輛并内之細工道具居宅土蔵一ヶ所

とあるもので、借主は河州額田村重次郎、貸手は立野屋平兵衛となっている。借賃は五輛合わせて銀一貫三百目（一年契約）で七月十四日と十二月晦日払いが条件であった。利用目的の記載はないものの、恐らく薬種の細末加工であったと思われる。



巨大な水車車輻

冒頭にも述べたように、水車産業は生駒地区だけでなく、西摂の灘目（西摂）水車群が有名であった。こちらは六甲南麓の傾斜面を利用し、菅屋川、住吉川等の谷筋に竹樋をかけて縦横無尽に水車場を設置したもので、一車輻に石臼が百以上も配置される大規模な施設であった。西摂水車が大阪油問屋の薬種油の

絞油を一手に引受けていたように、生駒水車も初期は大坂薬種問屋が所有する水車場として、地元住民が作業に従事するか、あるいは車輻を借用する形で積極的に活用したものであろう。西摂水車は絞油の役割が終えた後、水車株が譲渡される形で現地の人々の所有と



樋から水を引く水車

なるが、恐らく、生駒における水車も同じ流れをたどったと思われる。

さて、水車が江戸期における重要な産業であったことを物語る逸話を紹介しておこう。菅屋には「金兵衛焼車」という民話が残っている。丹波から菅屋の水車場へ出稼ぎに来た若者を追って国からやってきた娘が水車で働く青年に会いたい一心で現場に行くのだが、なかなか青年に会えず、恋慕の気持ちが紅蓮の炎となり水車場を焼き尽くしたとする、まさしく水車版安珍清姫の物語だ。これは、最盛期には夜通し「薬種油」を絞油していた現場に時間的余裕が無かったことを物語る逸話であろうと思われる。石切の水車でも赤鬼青鬼の話は何処かで聞いたことがあるが、これとて、薬種の細末加工を実施していた石切ではウコンをはじめ様々な色合いの薬種が作業途中に作業する人々の体中に付着し、近隣の子どもたちが恐れたことが話として残ったのではないだろうか。

ともあれ、現在では、辻子谷地域の象徴ともなった水車郷、歴史的な遺産が現代に活かされ、地域の紐帯のみならず教育の場所として、また、東大阪の伝統産業を伝える場所として、この場所が持つ意義は大きい。

（本学商業史博物館 主席学芸員）

そ

れはアラスカのジュノーに向けての航海であった。大圏航法でアメリカ大陸の西岸に辿り着くと、フィヨルドを半日以上航海する。その日午後八時に航海当直に入ると、右舷側に優に千メートルを超える山山が連なり、その端に満月が顔を覗かしていた。当直の引継をしてしばらくして右舷側に目をやると、満月はさらに高く上り、一面の水河を蒼い光で照らし出していた。あまりの幻想的な光景に見蕩れていると、フィヨルド特有の波の静けさもあつて私の耳からディーゼル・エンジンの音が消え、無音の水面上を滑るように航海する感覚に襲われていた。さらに、鈍く光る水河に狼の長く尾を引く声をたしかに聞いたような錯覚に陥っていた。

もう四五年も前の航海であるが今でも当時の情景を鮮明に思い出す。

その後、商船大学の専攻科に会社派遣で一年間学ぶが、このとき

研究を生活の一部にできたらいいなと思うようになり、同科を修了すると同時に広島商船高等専門学校に転職した。それが可能であったのは、ニクソン声明を聞く前の高度成長期であったからである。その頃の邦船社の船舶はすべて日本籍で乗組員も日本人のオールジャパンであった。船舶職員不足は著しく、養成定員を増加していたため教官も不足し、好条件で転職できた。

ところが皮肉なもので、卒業生が増加して間も

なく、ドルショックとオイルショックに見舞われ船社からの求人途絶えるに等しい状況になった。それというのも、日本船は次々と海外子会社に売却され姿を変えて便宜置籍船 (FOC: Flags of Convenience) となったが、そこでは外国人船員の雇用は自由で最も安い国の船員を雇うことができたからである。

ここで初めて便宜置籍船に出会うことになる。便宜置籍制度は国際的に大掛かりな仕組みの上になり立っており、長年の研究が必要であることは

## 便宜置籍船と国家

大阪商業大学比較地域研究所研究叢書第13巻

(御茶の水書房、二〇一三年)

### 自著紹介

武城正長

すぐ理解することができた。この頃から少しずつ資料を集め始めたが、当時は『海上労働法の研究』(多賀出版、一九八五)に精力を注いでいて具体的な成果をものにできなかった。

その後、商船学科の再編・新学科の新設や本学への転職などの大事が続いた。担当分野は大幅に拡大し、それに対応するための勉強・研究に忙殺された。そのため便宜置籍船については間欠的に論文を発表するに止まった。それでも、時期は特定

できないが定年までには便宜置籍船に関する研究成果を世に問おうと決意を固めていた。

幸いにも、定年を数日後に控えた本年三月末にそれを実現することができた。さらに、自費出版も覚悟していたにもかかわらず、本学比較地域研究所のご厚意により研究叢書として出版することができた。心より感謝申し上げる次第である。

「自著紹介欄」を与えられたのを機に本書とは異なった角度からいくつか触れておきたい。第一に、書名を「便宜置籍船と国家」としたことについてである。というのも、便宜置籍船は国家や国民経済から遠い存在であると思われるからである。たしかに、便宜置籍船は一生を通して船籍港に寄港することはほとんどない。パナマ船は例外といえなくもないが運河通過が目的である。

また、便宜置籍国にはもちろん子会社は存在するが、ペーパーカンパニーで帳簿すら備え置く義務がない。さらに、同国には船員はほとんど存在しないし、そもそも自国海運を振興させる気もない。それに加え、外国で建造された便宜置籍船は船籍国の国際収支において輸入扱いされず、運賃も外貨収入として計上されることはない。換言すれば、オフショア金融市場に似て、船籍税という所場代を稼ぐことを目的にしているに過ぎない。

このような存在であるにもかかわらず国家との関係は深い。まず、便宜置籍制度は近代的な国家主権の賜物といえる。国際法は、船舶に対する国籍付与は国家権力の発動であり、公海において排

他の管轄権を有する（明文化は一九五八年公海条約）と定めるように、古典的ともいえる国家観にもとづいている。また、便宜船籍制度の「起源」はアメリカの軍事戦略に求められるし、南北問題において南の国々が海運から貴重な外貨を得られないのは便宜船籍船のためであると強調していたことも記憶に新しい。さらに、一九八〇年代以降の先進国の海運政策は便宜船籍船を前提にしつつ、いかにそれに対応するかに終始した。このように、戦後ずっと世界各国は根なし草の便宜船籍船に振り回され続けてきたのである。

第二に、本書でもっとも力を入れた便宜船籍制度の「起源」について触れたい。形式的にいえば便宜船籍制度の起源は戦前のパナマの海軍法に求めることができるといえるが、実質的には、覇権国家たるアメリカが便宜船籍船を軍事戦略に組み入れたために誕生したといえる。というのも、便宜船籍制度は伝統的な欧州海運国の権益と衝突したからである。便宜船籍制度がパナマで一九三〇年代に「誕生」して以来、約半世紀にわたりヨーロッパは便宜船籍船に「反対し続けた。換言すれば、小国であるパナマのパワーだけでは便宜船籍制度を国際的に認知させることは不可能であったと言わなくてはならない。

アメリカの軍事戦略の賜物であることは、ギリシャ海運の隆盛と結びつく。米国は、冷戦下において総力戦を戦い抜くために、便宜船籍船をアメリカ船の代用物として創造したわけであるが、アメリカ自身は海洋

国家でなく、アメリカ資本の興味は便宜船籍船に向かなかった。そのため、アメリカは自国船主の代わりにギリシャ船主に目を付け、中古船や新造船の購入を資金面で支援した。一九四七年のトルマン・ドクトリンはギリシャ、トルコを反共の砦とすることを明言していた。アメリカは主に米国在住のニューヨーク・グリークなどといわれる船主を支援した。資本移動が制限されていたブレトン・ウッズ体制の下でギリシャ船主は特別の地位を得たことになる。



第三に、便宜船籍船が戦後に「誕生」して以来国際

海運が本来の姿に戻る機会が「回だけあったことに触れておきたい。「本来の姿」というのは、主権を行使して船籍を付与するのは自由であるが、その自由を行使した以上自国船籍船を有効にコントロールし、国際社会に対する責任を果たすことである。それは取りも直さず便宜船籍制度の廃止を意味していた。

その機会は一九七〇年代末に訪れた。まず、核兵器の発達により「総力戦」の時代は過ぎ去っていた。総力戦であれば便宜船籍船を含めた商船隊が不可欠であるが、アメリカがそれに固執する必要性は

失せていた。一方、欧州海運国は便宜船籍船の肥大化に苦慮し、基本的にそれを受け入れるかどうか追い詰められていた。さらに、便宜船籍船反対を明確にする南の国々は南々問題が発生する前の段階にあり、団結力には確固たるものがあつた。

その頂点は、UNCTAD（国連貿易開発会議）マニラ総会（一九七九年）に見出すことができるのであるが、思わぬ結果となつた。南の国々は定期船（航路）のトレードシェア（一九七四年条約化）に加え、欧州海運を市場から締め出すことを意味する不定期船のトレードシェアの決議案を強行採決した。そのため唯一のチャンスは潰れてしまった。

第四に、本書では正面から取り上げていないが、「海運の先進性」について触れておきたい。一般に、最初に多国籍企業化あるいは海外進出を果したのは海運産業であるとされる。また、グローバル化がもっとも進んでいるのも海運である。この指摘自体間違いないが、コインの表側と裏側で異なっていることに注意したい。たとえば、多国籍企業化といっても、海運の場合には前にも触れたように、進出先国の国民経済にコミットするわけではない。あくまでもオフショアに止まるのである。この意味において海運産業の従来の海外進出は、出国したけれども船籍国には入国しない多国籍化なのである。

最後に、便宜船籍船の将来性について述べておこう。便宜船籍船は低コストを武器に今後も増加していくと思われるが、中長期的にみるならば便

宜船籍制度のアキレス腱である国家主権にもとづく国籍付与(権)と管轄義務、その矛盾の増大に悩むことになるのではなからうか。

現在、後者の管轄義務は主に先進国のPSC (Port State Control) 入港国による監督で代替され、両者は大方バランスが取られている。だが一方では、便宜置籍船の増加で、先進国船社の「本社機能の海外移転」や船舶管理(業)の船員供給国への移転が進み、海事クラスターの衰退やホールディングカンパニー化が顕著になってきている(総体としての先進国海運の衰退)。さらに、投機資金の海運への流入は深刻な船腹の供給過剰を呼ぶ可能性が高い。大豆などの投機の商品と異なり、船舶は二〇年以上も市場で活動するからである。その結果利潤率は低下し、先進国資本は海運から撤退するかも知れない。一九八〇年代前半に英国でも似たような現象がみられた。そうなれば、先進国が便宜置籍船を支える意味はなくなる。また、先進国の財政危機はタックスヘイブンとしての便宜船籍国に我慢ならなくなる可能性も否定できない。

幸い、本書により日本海運経済学会および住田正一海事奨励賞の栄に浴することができた。重ねて感謝申し上げる次第である。

(元本学総合経営学部教授)

平成二六年一月二〇日印刷発行

## 市民向けビジネス講座を開催

大阪商業大学比較地域研究所主催

シリーズ市民ビジネス講座 第2回

メコン経済圏への躍動を探る

全4回

このところ、インドシナ半島がチャイナ・プラス・ワンの選択肢の一つとして注目を浴びている。多数の日系企業がこれら諸国において積極的な国際的事業展開に挑んでいる。この地域では、電力やインフラ整備、裾野産業の未成熟等々の問題が指摘されるが、それにもまして中間層の台頭、親日的であること、豊富な労働力・優秀な若者の存在などを背景に、企業集積が次第に見られるようになった。本講座では、躍動するインドシナ半島諸国の現状を多方面から分析し、メコン経済圏への胎動を明らかにしたい。

11月14日(木)

最近のベトナム経済動向と日本との経済交流

カオアインジュン (Gao Anh Dung)

在大阪ベトナム社会主義共和国総領事館領事

11月21日(木)

タイ経済のなかでの日本企業

関 智宏 阪南大学 経営情報学部 准教授

11月28日(木)

中堅中小企業の東南アジア進出の実態と展望

安積 敏政 甲南大学 経営学部 教授

12月5日(木)

過渡期におけるラオス経済

…改革、投資、および変化

ヴィサテップ スクサバン

(Vithatop Souksavanh)

神戸大学大学院国際協力研究科助教

◎会場 大阪商業大学GATEWAY4階

ネットワークレクチャールーム

◎時間 19:00~20:00

編集発行 大阪商業大学比較地域研究所 〒五七七七八五〇五 東大阪市御厨栄町四一〇 六〇六(六七八五) 六三三九  
印刷所 創造工房ライジングサン 〒五九九一八二三三四 大阪府堺市中区土塔町七九一四 六〇七二(三三〇) 七五〇三